

徐光耀と朝鮮戦争

——職業観・死生観を中心に——

陳肇斌

本稿は、これまで公表した中国市民と朝鮮戦争に関する数編の拙稿⁽¹⁾と同様の問題意識から、戦争勃発時から中国の軍事介入に至るまでの時期を対象に、中国軍の将兵がどのように反応していたのかという問題を明らかにするため的一部分として、当時華北軍区隷下にあった第二〇兵团政治部の中級文化将校の一人、徐光耀⁽²⁾を取り上げる。

徐は一九二五年に河北省雄県の中農家庭に生まれ、盧溝橋事変の翌年に一三歳で八路军一二〇師団に入隊した。幼少から文芸に親しみ、一九歳を過ぎた頃その志向をいつそう明確に自覚し、平和回復後には進学する念を強めた。軍務のかたわら短編の習作を新聞に投稿し、四七年一月に華北聯合大学文学部に進むも、国共内戦の激化によって学業を中断せざるを得なかった。華北地域に再び平和が訪れて新政権の成立を間近に控えた四九年七月頃、第二〇兵团政治部が天津市に駐屯したが、徐はプロの作家になるべく創作に専念し、四二年五月の日本軍による大掃蕩に対する自らの体験に基づき長編小説『平原烈火』を同年末に完成した。

五〇年の初夏は、兵团司令部・政治部の再編と解散が進められ、徐個人にとってもデビュー作の刊行発売を待望しながら、文学理論を含めて広く知識を吸収すべく、中央政務院文化部に新設される予定の中央文学研究所に修習

生として採用されることに期待をかけて復員活動を進める最中であった。日中戦争、国共内戦によって妨げられながらも抱き続けた文芸に転身する夢が、ようやく実現するかのようには思えた。しかし周辺地域の半島における戦争の勃発、とりわけ政権の派兵介入によって、三度目に夢を絶たれかねない事態に直面せざるを得なかった。本稿は、主として徐の一〇巻本の日記および作品に基づき、その職業観と死生観を中心に、朝鮮戦争に対するかれの反応を考察する。

一、職業観

1、復員希望

天津にいた徐が日記に朝鮮戦争にはじめて言及したのは、勃発二日後の六月二七日であり、「昨日の新聞に天下の一大事が掲載され、朝鮮では大戦争が起きた由」とある。二日後というのは、北京にいた気象学者の笠可植や上海にいた歴史学者の顧頡剛がいずれも戦争勃発を二六日の日記に記したのと比べても分かるように、兵団内に設置されていた新華社支社の記者を主な仕事としてきた徐にしては、遅すぎた感がある。その後、八月八日に中ソ友好協会で、フランス共産党中央委員で『人道新聞』[*Humanité*]の記者として戦争勃発初期に半島を取材したマニアン (Magnien) が行った朝鮮情勢関係の講演会を聞いたが、拙い「通訳のせいで」得るものは少なく、九月一〇日には、中国大劇場で朝鮮から帰国した郭沫若の講演会を聞き、「一人あたり一〇通の手紙を書き、農村部住民の署名をもらう」という郭の提示した北朝鮮応援の方法に、実効性のあるものとして感心した。^③

朝鮮戦争について、戦争勃発から一〇月三日にかけての三ヶ月あまりの間、明示的に徐の日記に記されたのは、以上の三ヶ所のみであった。その他には、一回だけ「情勢」という間接的な表現が八月一七日の日記に確認されるが、戦況の大逆転をもたらしかねない米軍の仁川上陸作戦に関する言及すらないことから、徐には朝鮮半島に対して積極的な関心がほとんどなかったと見てよい。天津は日清両国が朝鮮をめぐる緊張関係を調整する一八八五年の「天津条約」の締結地で、徐の所属した第二〇兵団政治部・宣伝部が当初、進駐した海光寺は、義和団事件後の「北京最終議定書」に基づいて駐屯した日本のいわゆる「天津軍」の兵営であり、朝鮮甲午農民戦争に端を発した日清戦争の際の清軍側指揮官で、その六年後の八国連合軍の侵攻への抵抗を指揮し日本軍の攻撃に斃れた直隸提督聶士成の顕彰記念碑⁽⁵⁾からは遠からぬ距離にあったが、それを徐が認識したことを裏付ける資料はかれの日記や作品からは見当たらない。

第二〇兵団司令部・政治部が実際に九月一〇日に正式に解散されたことを考えれば、朝鮮に対する徐の関心が薄いのも無理はなかった。兵団が整理再編されるとの情報も春からあり、九月に華北軍区等の機関に吸収合併されることは早い段階から予定されていた。事実、七月一日に兵団司令官楊成武が参会した司令部・政治部要員らの宴会を、徐が「解散の宴」と捉えていた。この時期の徐の日記の内容をみると、結婚と就職活動に関する記述によってほぼ埋め尽くされたと言っても過言ではない。むろん、これは徐にとどまらず、かれの同僚に共通して見られた傾向であり、同じく兵団政治部の宣伝部編集課の臨時責任者を務めた姚溶焗が新華社本社に移るべく先に華北軍区に異動し、課員の徐孔が天津市警備司令部に配属され、趙仲三が中央政務院公安部に移籍し、魏質彬が天津にある中国紡績会社に復員することとなっていた⁽⁶⁾。

では、徐はどのような場所を理想の復員先として考えていたのであろうか。朝鮮戦争勃発三週間前の六月三日、

兵団政治部の事務室で整理再編に関する討議が行われ、徐はみずからの考えを語った。それによれば、徐は以前から「生涯の職業として文学に従事すること強く決心し、この夢は揺るぎないもので」、軍にとどまれと言われればそれに反対はしないが、「軍と民から選べと言われたら、自己の希望としては復員することである。」その最大の理由として挙げられたのは、「軍隊生活の窮屈さ」であった。「中央文学研究所が創設されたら、そこに入り、修習を経て、職業として文学創作に携わる」との意思を徐は表明した。しかし前日、恩師の陳企霞宛に書いた手紙においては、復員するよりも「確かに自分は軍に残った方がいい。……文学研究所に進学することができなければ、軍に記者としてとどまる」ことも書いていた。それは、中央文学研究所の創設がまだかなり先のことと予想され差し当たり現在の軍務に専念すべきだという陳の助言に対する返信であり、徐の同日の日記にも「半分以上は本心」と記されたこと⁽⁷⁾から、部分的に陳の意見に合わせた言い回しのように読み取れ、翌日の討議における意思表示は徐の「本心」そのものであったように思われる。いずれにしても、両者の相違は文学研究所が創立される前の段階を軍にとどまって過ごすか、それとも復員して待つかということにあり、作家になるべく文学研究所に進学するという目標自体は一貫していた。

六月中、兵団司令部・政治部の再編はさらに進んだ。戦争勃発の三日目にあたる二二日、徐の直属の上司にあたる沈凶・政治部宣伝部長も、みずから就職活動を行った結果、中ソ合弁航空会社の副支配人に就任すべく、まもなく離任することとなった。それを戦友から告げられた徐は自分にとつても移籍活動のいい機会と捉えたが、なにして「文学研究所は遅遅として創設されず」、焦燥感を募らせた。ようやく、七月七日に落手した華北連合大学時代の学友の手紙から、陳企霞が加わる文学研究所準備委員会が開催され四〇―五〇名ほどの修習生候補者リストに徐の名が連なっているとの内部情報を知った。開学までまだ二、三ヶ月の時間を要するが、徐は、「万歳、万歳、

万々歳！」と欣喜雀躍した。また翌々日の九日には、ちょうど一年前に書き始めた小説の出版広告が八日付の『人民日報』にあったのを不意に発見し、それまでの努力が実り作家になる夢への第一歩を確実に踏み出せた喜びを噛み締めた。⁽⁸⁾

しかし文才をもつことは不利な材料となった。大量復員が進められるなかでも、有能な徐を軍側が手放さなかった。徐は所属兵団のセクシヨナリズムの犠牲になることを恐れていたが、果たして七月二三日に、文学研究所に行く意思を上司の魏沢南宣伝部長に伝えた際、魏からは兵団司令部・政治部の解散後も徐のような人材は「軍団または華北軍区に必要とされるかもしれない」と含みのある言い方をされた。徐にとって文学研究所以外は考えられなかったが、組織部の董奮課長からは、「君の決意が固い。上の意思も固い。これでは対立するね」と言われた。それに対して徐は、「ならば、今回は不服従との廉で処分されるリスクを冒してまで自分の意思を通したい」と応えた。徐は「自分の運命を決める重大な関頭に立った」と認識し、闘い抜くことを心に決めた⁽⁹⁾と日記に記した。

一週間近く経た七月二十九日になっても、文学研究所の創設に関する正式な情報はなかった。二週間あまりを経た八月九日の朝、ようやく『天津日報』で掲載された、一〇月中旬に文学研究所が正式に開学するという記事に接することが出来た。徐にとつて、二年の学業の終了後に元の職場に戻るといふ規定の文言には「不快を感じた」⁽¹⁰⁾が、朗報であることは間違いなかった。董課長を含む同僚らも例外なく喜んでくれた。早速、所属の宣伝部長および組織部の部課長宛に、文学研究所行きの希望を正式に提出すべく手紙を書いた。これだけではまだ成功が覚束ないことから、上級機関にあたる華北軍区の藍矛副部長ら関係者の顔を思い浮かべながら軍区側に対しても根回しをする必要を感じた。

案の定、さらに一週間あまり経過した一七日になっても、復員許可は出ない。その間、徐孔が北京からもたらし

た情報を総合すると軍区側には徐を雑誌『華北解放軍』の編集担当に充てる意図があるように徐に思われた。一七日の董課長の説明でも、軍区からの命令がないことが理由として挙げられた。同時に、魏質彬の予定していた復員先からの割愛願いが拒否されたことも告げられた。ある同僚の解釈によれば、「情勢があまりにも緊迫した」ためとされ、徐の進路希望も「甚大なりスクに晒される」との懸念が示された⁽¹⁾。いわゆる「情勢」とは、日記に明示はされないが、むろん朝鮮戦争に他ならなかった。当時、北朝鮮軍の進撃が洛東江付近で国連軍に食い止められ当初の勢いが殺がれたとはいえ、兵団の統廃合が予定どおり進められてきたそれまでの戦局と比較してどの程度「緊迫」の度合が増したかは別として、徐の復員にとつて積極的な材料にならないことは間違いないかった。

同日の一七日に徐は、兵団の上司を飛び越えて上級機関に直訴する拳に出て、華北軍区の藍矛副部長宛に「失礼なほど激しい言葉で懇願の気持ちを込めて」書信を認めた。日記において徐は、自己のこの目的を達成するため「党籍が剥奪される直前まで」闘い続ける決意を記した。一五日に再度、復員決定の進捗状況を問い合わせる手紙を藍矛副部長に書き送った。その心情を翌日の日記に吐露している。「文学研究所行きの方は、常に私の心中で激しく興奮を引き起こしている。私の考えでは、一人の人間の将来の発展を視野に入れていけば、その者の仕事をいい加減に決めることは許されるべきことではない。自分は作家になる可能性をもっていると思つている。それが軽率に処理されるのを私は許さない。この道は自分で千辛万苦を経て切り開いてきたものだ。それを妨げることは私の進む道を断つことと異ならない。ならば、私は反抗する」⁽¹²⁾

以上みてきたように、五〇年六月初めから九月下旬に至るまで、徐の関心はもっぱら復員して文学研究所に進学することにあり、朝鮮戦争はみずからの復員に影響を及ぼしかねない一因となつてはじめて関心を持たれたと言えらるほど、基本的に遠い海外で起きたものとして受け止められた。この時期、徐の復員希望を真に妨げる要因として

考えられたのは、主として上司の無理解に象徴されるように、個性の伸張を認めない窮屈な軍隊組織そのものであった。

2、天職

そもそも徐には、職業軍人として一生を送りたくないとの思いが以前からあった。山西省の太原攻略戦を控えた四九年四月五日、徐は同僚の徐孔と交流した際、組織の論理を最優先する軍隊と、作家の個性を最大限に主張する文芸との不調和がもたらした悩みに言及した。「生憎、われわれは文章に志をもっている。にもかかわらず、上司はそれを認めてくれない。そこでさまざまな苦悩が生じる。」同日の日記に徐は、さらに記した。「先日、課長の董奮が、そのうち軍に幹部の職業化を導入する話題を提起したが、甚だ恐ろしいことと感じた。誰がそのまま職業化していききたいものか。こうして、私は抜け出すことの難しさをますます感じるようになった。この諸々のことで、私はますますホームシックになった。故郷の田園生活、あの豊かで美しい語彙表現、人間関係、いろいろなエピソードに内在する、このうえなく豊富な文芸創作の源泉となるものを恋しく思った。」一七日、革命勝利後に党の活動の重点が生産建設に移っていき、今後兵団は華北地域にとどまるであろうと聞いた徐は、「華北にとどまるようであれば、自分は軍からの復員を要求したい」と決意を新たに⁽¹³⁾した。

徐はみずからの「適性」を文芸にあると位置づけ、それを明確に自覚したのは、一九歳を過ぎた四四年一二月頃であった。「自分は生来、文芸のことが好きであった。学校にいた頃は、国語の成績が一番よかった。子供の頃から小説を愛読し、今もとくに文章を書くことが好きである。音楽を好み、絵画を好み、各種の文学芸術類の書籍を

紐解くのを好む。文学者を崇拜し、劇団の人々に近づくことを好み、あたかもそれに取り憑かれたような気持ちになる。」抗日戦争に参加した当初から文芸の仕事に携わっていれば、今は相当な発展ができたであろうと独りでよく思う。しかし今は除奸業務をして取り柄というものは何一つないような状況にあり、心中、誠に落着かない。このことに考えが及ぶ度に、抗日戦争が勝利した後は、必ず進学を申し出たいと思いを新たに¹⁴した。」

宛がわれた軍務と好きな文芸との間の不調和それ自体に徐が感じはじめたのは、それよりもさらに以前の段階からであった。かれの四四年一月二八日付の日記によれば、早くも四一年、ひいては入隊した翌年の「三九年にまで遡ることができる。当時すでに心の葛藤があったが、今年ほどではなかった。転業する気持ちは存在していたが、今ほど決意は固くなく、まだ除奸の仕事に携わる意思の方が優勢であった。」それが一九歳を過ぎた四四年末現在、やはり心は文芸の道に進むことに大きく傾いたと、一層つよく自覚した。¹⁵

終戦後に進学したいとの思いは少なくとも同年三月一二日の日記においても確認される。「知識が増えるにつれて、向学心は強くなる。抗日戦争が早く勝利し、早く学校に行つて勉強したいと切に願っている。抗日戦争が勝利した後、私の進学への希望を上級機関が認めてくれなかったら、あるいはこの問題を適切に解決してくれなかったら、自分は大いに不満をもつであろう。」まだ進学が不可能な時点では、徐はただその機会の到来を漫然と待つのではなく、日々の生活のなかで勉強する環境をみずから作っていくことを考えた。「さし当りは、自分からすすんで他人を助けながら代わりに他人の知識を吸収することを如何に実行するかという問題である」と自分に言い聞かせた。¹⁶同時に、文芸の本を入手して独学に励んだ。同年初頭、徐は五世紀末、南朝・梁の劉勰が著した全一〇卷五〇篇構成の文学理論書である『文心彫龍』を手に入れた。しかし、一月三日に日本軍の襲来に備えて部隊の移動が決まり、行軍に不便な所持品を敵の手に渡らないように処分したり嚴重に隠匿しておかなければならなかった。周

團が出発の準備に各々取り組むなか、徐は同書を読むことに専心した。「学習しながら軽装するという方法で、この分厚く大きい書物を読み終わってから嚴重に隠すつもりでいた」⁽¹⁷⁾つまり何よりも自らの脳内にその本の内容を確実に保存しておくというのが、その考えであった。同様に、四五年五月一六日、対日協力軍の拠点を包圍して戦闘が続くなか、「二冊の『現代文規範』を得て、退屈を紛らすため、ときどき紐解いていた」⁽¹⁸⁾

同時に徐は、「文化工作隊」のような、少しでも文芸に近い職場への異動を希望し続けた。しかし、「個人が集団に服従しなければならぬ」という理由で上司には容れられなかった。⁽¹⁹⁾結局、脚本創作係として劇団に向向できたのは、日中戦争が終結しさらに国共間も米国側の軍事調停を受け入れて一時的な平和がみられた四六年五月であった。半年後、劇団の近隣にある華北連合大学の授業を聞くのをきっかけに、上司の反対を押し切って文学部への進学⁽²⁰⁾の機会を掴んだ。しかし、これも国共内戦の激化によって一年半ほどで終了せざるを得なかった。

軍人記者をしながら悶々として過ごしたなか、四九年二月一日、無血開城した北京への入城を控えて軍の劇団の出し物をみながら、「二芸で身を立てる」思いを強くした。「人間は自らの理想に従って生活し、自己を愉悦させるに足る技芸を一つ身につければ、そのような一生を満足とすべきである。もつとも悲しいのは、ぼんやりして生きてまたぼんやりして死んでいき、苦痛もなく楽しみもない生き方である」⁽²¹⁾これと同じような感想は、一〇月二三日に天津で青年文化工作団の出し物を見た際にももたれた。「人間は一生を生きて一つの専門的技能をもつべきである。さもなければ、つまらない人生になる」⁽²²⁾

この時点で徐にとつての「二芸」は、もちろん作家になることであつた。同年六月に徐は、「かりに人間は死んで生まれ変わることがあれば、自分は来世も文学創作を志す」と友人に語つた。しかし党の文芸政策は、無理して解放区内の文学青年に速成教育を施しても大した成果が期待できず、新たに支配下に収めた旧政権支配地域の知識

青年から人材を選抜して作家を養成することに傾斜しはじめたかのように見受けられた。前者に属した徐はそれを聞いて「あたかも見捨てられたような感に駆られ」、体中の血液が一気に頭部に上つて興奮した。しかし天を怨むよりも、まず自分の努力で作家と言えるほどの実績を作り出さなければ認めてもらえない。⁽²³⁾ そのように考えた徐は、長年にわたつて資料を集めながら温めてきた構想を長編小説に仕上げることに専念した。

天津進駐の直後であつた四九年七月七日から執筆に着手し、二ヶ月ほどかけて草稿を完成した。加筆修正を重ねたこの作品は、文壇の先輩でもある陳企霞からの評価を得て出版されることになった。刊行を待っている間の五〇年三月三日に新聞から、五〇年度中に実務経験がありかつ書く能力をもつ文学青年を募集して水準を向上させるべく「中央文学研究所」を創設するという記事に接して、「ああ！天と地に感謝する！これこそお天道様がみているということだ。早くその竜のような丸い目をもつと大きく開いて私を御眼に御留め下さり、私をそこに異動させてくださるよう祈る！」と日記に記した。翌日それを掲載した新聞社および陳企霞に自薦する手紙を書き送った。陳への手紙では、過去にも大学に戻つて勉強したい気持ちが強かったが、まだ戦争中であつたためそれを抑えてきた。しかし今は平和の時代になり軍に残つても大して役に立てることはなからうし、この研究所創設を機会に進学したいという熱い気持ちを伝えた。⁽²⁴⁾ 五〇年夏秋に朝鮮戦争に対して徐が示した反応は、以上のようなかれの職業観と密接に関係した。

二、葛藤

1、戦争の暗雲

朝鮮戦争を徐がみずからの切実な問題として強く意識せざるを得なくなったのは、第二〇兵团を去って北京にある華北軍区政治部に異動した数日後の一〇月四日以降であった。それまで徐は中央文学研究所に進む道の第一歩、すなわち兵团から軍区政治部に移ることが許され、九月三〇日に関係書類を携えて上京したが、軍区への異動は形式的な手続に過ぎず、その直後にそこから中央軍事委員会総政治部を経由して復員し、文学研究所に入所するという段取りが予想されていた。しかし復員は上京後も相変わらず軍区側から認めてもらえなかった。四日に軍区担当者から聞いた情報によれば、「文学芸術に従事する幹部を研修に送り出すことにはあまり賛成せず、経験の少ない初級の作家に書く知識や能力を身につけさせる場合しか賛成しない」というのが、総政治部の方針であった。⁽²⁵⁾

しかし徐は、一〇月一日の国慶節パレードに参加する中央政務院文化部の隊列に加わったことから分かるように、すっかり文学研究所の所員になった気分であった。軍区担当者から消極的な情報を聞かされた徐は、「非常に苛立った。」さつそく文学研究所側の理解者の一人、学友の陳森を訪ねて相談した。それを知った陳は軍から修習生を募集すること自体に「自信を喪失した。」徐は同日の日記の末尾に「本当に難しいな」との嘆息を記した。その一文の前に、自らの運命に対して影響を与える決定的な要因として、「総政治部」と同時に「国際情勢」を併記した⁽²⁶⁾ことから、徐とその軍区担当者との間で朝鮮半島における戦局の急変も話題に上ったと思われる。朝鮮戦争

を含意する「情勢」という言葉が徐の日記に登場したのは、前述の「八月一七日」に次いで二回目になる。仁川上陸作戦後の国連軍の巻き返して北朝鮮軍が敗退し続け、一〇月一日に韓国軍が東海岸方面で三八度線を越えて元山に向けて北進し始めた情勢を考えれば、その深刻度はとうてい前回の比ではなかった。

徐の文芸への夢は、またもや戦争によって潰えるかのようにみえた。それに、『華北解放軍』編集部の戦友から、徐を軍区にとどめておく意向が上司にあるとの風聞を聞かされ、徐はますます焦燥感を募らせた。一九日に総政治部文化部の劉白羽副部長宛に手紙を書き、みずからの研究所行きの希望を述べその承認をつよく懇請した。それと前後して、研究所創設者の丁玲が党組織の副書記を務めた中華全国文学芸術界聯合会（「文聯」）からも、軍からの修習生募集について、総政治部に対する交渉が試みられたが、後者によって拒否された。諦めなかった「文聯」は、毛沢東の秘書を兼務した胡喬木・党中央宣伝部副部長という強力な仲介者を通じ、しかも人数を絞って徐光耀、張志民をはじめ四、五名の有望な候補者を指名してその入所を要請したため、総政治部も同意せざるを得ないであろうとみられた。徐は一〇月二日夜、陳森からその「愉快かつ幸せなニュース」を聞いた。西北軍区隷下の第一九兵团から派遣された鄭智という修習生が、すでに総政治部の許可を得たのみならず、「現に文学研究所に到着した。」この前例もあって徐の「心は、また飛翔し始めた。」同時に、感謝の念を思わず道教の神に向けて、「お天道さま（ホワシティアン）は志のある者をついに見捨てなかつたのだ！」と同日の日記に記した。⁽²⁸⁾

他方、暗雲も朝鮮半島方面からさらに迫ってきた。前述した喜びと感謝のくだりの続きに、徐は次のように記した。「しかし東北地域の情勢は非常に緊迫している。昨日に瀋陽から来た者の語ったところによれば、同地では女性子供の疎開を三日以内に完了させるよう命令が下され、山海関を通って内地に入る列車が想像を絶するほど混雑し、一部の工業施設も疎開し始めた。」徐が一時的に籍を置いた華北軍区政治部においても、文芸課長によれば、

「今後、日曜日のお休みを返上し、勤務時間を八時間増やすよう」との命令が上級機関から下された。戦友の「張志民は朝からおろおろし、朝鮮では大変な戦局になったと騒ぎながら、一枚の地図を持ってきて、米軍が平壤近くまで迫り、平壤も持たないだろうな」と語った。平壤は一九日にすでに陥落していたことから、ここで張らの情報に戦況と若干の時間差がうかがわれるが、風雲急を告げる半島情勢に、軍区政治部員の間で大いに動揺したことは読み取れる。文学研究所に復員する計画も立ち消えになるのではないかと恐れた徐は、「自分の命運は、結局は国際情勢によって決められるのか」とその不安を記した。⁽²⁹⁾

翌二二日に、「時局は少しずつ緊迫し、いたるところで、戦争のことが話題になった。」軍区政治部において進められた「整党」活動にも、朝鮮戦争関係の内容は新しく加えられ、「無関心で姑息な平和を好む思想があるかどうか」が主な議題とされた。徐は、自らの文学研究所への「入学に関することは本当に、緊迫した時局の影響を受けることになるのであろうか」とますます不安となった。徐の観察によれば、「人々は戦争の話題に触れると、みな恐れる表情を浮べている。少なくとも喜ばないことから、一般に厭戦気分がうかがわれた」⁽³⁰⁾。この「人々」とは、むしろ第一義的に徐の周囲にいた華北軍区政治部員のことと思われる。

一見して不可解なことに、徐は自らの進学が朝鮮戦争によって影響されるのを憂慮したが、他方で周囲の示した厭戦感情を「残念なこと」として捉えた。それも、同じ日の日記においてである。これについて、徐は「実際に戦争が否応なしに眼前に迫ってきた場合、われわれは真正面にそれを受けて立たなければならない」と記した。⁽³¹⁾これらの記述から、プロの作家を目指すべく進学を願って戦争を忌避した一個人としての徐Aと、軍人と党员としては命令に従って戦争に立ち向かうべきと信じていたもう一人の徐Bとが並存し、両者の間で徐の心が激しく揺れ動いたように思われる。

実際、徐はみずからを鼓舞するため、一〇月四日に一目ぼれした恋人のことと重ね合わせるべく、ブラジルの作家、ジョジェル・アマードに由来したと思われる言葉を次のように引用した。「愛情に死の影が差しかかっている。われわれは婚約した人々、夫と妻を守らなければならない」⁽³²⁾ 一般に戦争支持に傾く者に自己の行為の意味づけとして「愛する人」や「使命」等のためという理由がよく挙げられるが、徐も例外ではなかったのである。アマードの言葉の続きに、徐はさらに記した。「愛の神は私に近づいたばかりであるが、戦の神もそれに伴って間もなくやってくる。かりに戦争が起きれば、私はそれを素材に偉大な作品を創作する。その機会と時間を与えてくださるのを神様サンデー（「上帝」）に祈りたい」⁽³³⁾ 徐の日記に、それまで見られなかったキリスト教の「神」に祈るような表現が突如としてあらわれた。みずからの内部にある戦争忌避の一面を説き伏せるべく、かなり無理を重ねた痕跡として読み取れる。

2、躊躇逡巡

一〇月二三日にある者の研究所行き申請が許可されたとの情報があり、翌日にはそれと正反対のこと、すなわち文聯の総政治部に対するいわゆる要請は「指名移籍ではなく、問合せ程度のもの」という情報もたらされた。こうした一喜一憂の伝聞に翻弄された徐は、総政治部の担当者に直接確かめるべきかどうかについて、「躊躇逡巡しながら、ついに『より勇敢な一面』が勝った。」⁽³⁴⁾ 二五日にみずから総政治部文化部を訪ね、劉白羽副部長から「行っていい」との口頭支持を得た。同日の日記の題に「吉日」と記した。翌日に再度訪問して、深く意見交換したうえ、劉の華北軍区に対する直筆の依頼書ももらった。徐は三日以内に研究所に転居することを思い描いた。と

ころが、劉の依頼書を軍区政治部の文化部長に提出した際、支持を表明しながらも人事政策全般に関する総政治部側の「意図を確かめてから返事する」という含みのあることを聞かされた。徐は、総政治部側に対して自分の異動の件を人質にして条件闘争を行う意図が軍区側にあるとみて、不吉な予感に襲われた。提出前に文学研究所側に對して部屋の用意を電話で要請したが、提出後には「どうやら時期尚早のようだ」との伝言メモを研究所側に残さざるを得なかった。⁽³⁴⁾

徐の運命は、一〇月二十九日になって、ようやく最終確定された。夜「七時三九分」に、正式な許可が出たとの電話が、軍区政治部文化部長の秘書からあった。徐は同日の日記の題に「狂喜」と記し、その決定的瞬間を讃えるべく詩を作った。翌日、離職手続を進めるべく登庁し、宣伝部長からわずかに一言、「行ってよし」と言われた。徐の気持ちは、「阿弥陀仏！」と心の中で叫んだ。少なくとも理論上において無神論のほの共産黨員、徐の日記に一週間余りの間、「天道」と「神」、「仏」が立て続けに現れたことから、その歡喜のほどがうかがわれる。その日の日記の題に「黄金のような日」、各機関間で諸手続が順調に終了した三二日には「一層燦然とした黄金のような日」、さらに念願の入所初日の一月一日には「充実した一日」と題された。⁽³⁵⁾

しかし戦局が一層緊迫していき、徐はそれとの関わり方に相変わらず悩まされ続けた。「抗美援朝」運動が進行するにつれ、心の揺れの振幅が一層大きくなった。一月五日の日記に、「午後、気持ちが乱れて落ち着かず、今年に入って以来なかったほどである。二、三年前に遡ってみても、なかった」と記した。その理由として、書籍等所持品の扱いや衣類等生活上の瑣事の前に一番に挙げられたのが、「学習できる機会は、いかに得がたいものか」という表現にあらわれる不安であった。⁽³⁶⁾

その学習の機会を脅かしていたのは、むろん同日に公表された「抗美援朝に関する中国各民主党派の宣言」と、

それに伴って呼びかけられた、朝鮮やそれに隣接する東北地域に赴いて支援活動を行うようという政権からの要請であった。四日前の入学初日に行われた「援朝創作運動座談会」の前にはまだ「反米」と冠していたが、この日からは「援朝運動」を語る際に、積極的な行動に移ることを含意する「抗米」に変った。徐にとつて、その呼びかけに応じるべきか否かが、問題であった。

——ようやく挿んだ研修の機会を手放したくないのは本音である。

——「しかし、朝鮮に行つてあらためて戦闘を体験し、朝鮮人民の偉大な国際主義精神を体験し、世界中の共産党はみな同じ家族だという偉大な気持ちを体験することも、前向きなことではないか。」

——「ただ、考えてみると、入隊してこのかた一〇数年が経ち、大隊長級の幹部の立場にいることから、冷静に行動すべきであり、一時的な衝動に駆られて応募すべきではない。党に必要とされることと、その全体の意図についても考えるべきである。」³⁸

その日、食卓を囲んだ学友はみな「平静にして、誰も応募のことを口にしなかった。」しかし徐は、「食べても味が分からず、坐つていても落着かず、この上なく気が重かった。」一旦、応募しないことに傾いたが、心は依然として揺れ続けたのである。

——「一共産黨員としての責任と、軍隊から来た経歴に伴う義務を感じた。」³⁹

この五日付の日記においてみずからが落着かない理由の一つに「軍籍の不安」も挙げられたが、それは、修習生になる希望を総政治部に認めてもらう際に、修了後に軍に戻る条件が劉白羽副部長によつて課されたため、籍を軍に残したままであった⁽⁴⁰⁾ということと関係する。これが徐の「義務感」を一層強めたようである。しかし、この記述の直後に、以上のような悩みの往復から逸脱したかのような記述が同日の日記に見られる。

——「気が重くなったことは、私の内心の純潔さと党員としての自覚を裏付けている。冷淡な様相を呈している周囲と比べたら、まだ評価に値するものがある。……自分の場合は、農家の子弟であつたにもかかわらず（日中戦争中に）自ら入隊を申し出たこと自体、大した行動であつたことは間違いない。」この自己評価は一見して唐突のようにもみえる。徐自身は、「いわゆる人間の内心の葛藤とは、実に複雑かつ具体的なものである。人の心に入つてその内在的なものを理解することは、やはり難しいようである」と記したのみである。⁴¹ 徐自身が意識したかどうかは別として、既有的貢献度への言及は、応募したくない本音に対して「立場上」生じた呵責の念を打ち消すべく試みられた心理的補償の一つであつたように思われる。

いずれにしても、明確な「結論が出ず、ますます追い詰められ、その苛立ちが募るばかり」という深刻な事態は、一向に変らなかつた。夜になつて所員の間で、文学研究所から人員を派遣しない方がいいという文学界の有力者、沙可夫の意見が伝達されたり、東北地域には一部の後方支援要員を必要としているのみで自分らが行つても役に立たないとの見解が語られたり、また陳森からは何としても行きたいと強く表明された。そのなかで、徐は正式に態度が表明されることになる「明日、また様子をみよう」と考え、結論を先送りした。⁴²

翌日、「研究所自体が創立したばかりで、その本来の計画が崩れる恐れがあることから、現段階では文学研究所から東北に支援人員を出さない」という沙可夫の最終決定が伝達された。⁴³ もう悩まされずに済んだかのように思われた。しかし五日後の一日の午前の時事学習の終了時に、研究所側からは、「次に朝鮮に行けるようになった場合に備え、第二陣の「援朝志願隊」に応募するよう再度の呼びかけが修習生に対して行われた。徐は日記に次のように記した。「私は内心、またもや激しい葛藤に苦しんだ。ついにこのように決心した。かりに党が求めたならば、私は早く赴くことにする。かりに文学研究所全員が行動をともに行くのであれば、私は当然、その倍以上の喜びを

もってそれを歓迎する。しかし、かりにそれは一般的な呼びかけであれば、自己都合から応募しない方が適当と私は思う。⁽⁴⁴⁾

さしあたり応募しないことを決めたが、葛藤自体が消えたわけではなかった。三日後に友人からある会合で上映される映画を見に行くことを誘われ、一旦は応諾したが、よく考えて見たら「行くべきではないし、行き辛い」と思い、中止を決めた。「東北地域に赴く関係者を送別する会合であり、自分はそこに行ってもきまりが悪い⁽⁴⁵⁾」と考えたからである。

三、死生観

1、「生離活別」

徐は生命の危険が伴う後方支援または前線勤務に応募するかどうかを決める際に、「戦死」についてどのような考えたのか。前述の心理的葛藤を記した一月五日と一日付の日記には、それに関する記述はなかった。約一年半後、徐が実際に朝鮮に赴くことを控える五二年春の日記には死を恐れるどころか、それを意識すらしなかったような記述は多く見られる。三月一四日の日記には、上海出張に出かける友人から、次の再会は徐らが朝鮮から帰ってくることになる半年後になるであろうと言われ、「初めてこの別れの重大さを意識した」と記される。「そうだ。これは重大なお別れなのだ。すぐ朝鮮に行く前のお別れなのだ。しかし私はそうした重大さの感覚を全くもっていない。これは戦死について考えなかったことの明らかな証ではないか。戦場に行くことは、私にとって家に帰るの

と同じ気持ちのようだ。」次の日に姉宛の手紙にも、「朝鮮に行こうとして、とてもうれしい」と書いた。⁽⁴⁶⁾他方、朝鮮に行く前に徐は一度帰省し、銀行預金八〇〇萬元について予定の「年末に帰ってこなかった」場合、処理してもらうため通帳を姉に預けた。このことから、帰って来られない事態も考慮されたように思われる。ただ、朝鮮行きを「新生命の始まり」と位置づけられたこの時期の徐の日記の記述には、不安を覗かせるような文言はほとんどなく、総じて言えば気持ちが高揚していたように見受けられる。⁽⁴⁷⁾

しかし、そのような落ち着いた態度は、徐が前線に赴くにあたって常にみせたものとは当然、言えない。国共内戦が激しさを増す四八年五月初旬に徐は、「戦死」を強く意識して落ち込んでいた。それまで在学していた華北連合大学における学業の継続に淡い期待をかけていたが、大学側の方針に従って従軍記者として野戦部隊に加わることに決まった。軍人として命令に従う以外に選択の余地がなかった徐は、私物を整理して一つの箱に納め、将来その箱を開ける者宛のメモをも用意した。それには、戦死した場合に備えて遺品の送り先として父親と姉の氏名と住所を書いた。「それを書き終わった後、心中、名状し難い悲哀感に襲われた。箱の隙間からメモを入れようとしたが、何故かうまく入れることが出来なかった。ふと一念発起した。死ぬことがなければ入らない、死ぬことがあれば入ると。そう考えた瞬間に、そのメモはするりと箱の中に入ってしまった。ますます心が千々に乱れるようになった。」⁽⁴⁸⁾

この一部始終を徐は日記において「文学的」に記述しているが、それを「論理的」に整理すれば、当初から戦死を忌避する感情がつかつたがゆえ、蓋を開けて箱に入れるような普通の方法をとらず、板の隙間から入れるという比較的に入りにくい方法にした。その手が震えていなければ、無意識のうちにメモが「入らない」ようにしたであろう。しかし、そのようにしていると、いつまでも準備作業が終わらないことを本人も意識しはじめたためか、

自分の意思を超える偶然の力に委ねようと考え直したら簡単に「入ってしまった」というところが、真実に近いように思われる。

その後、戦死を強く意識した悲観的な気分は、少なくとも二日間は続いた。徐は「暴飲暴食の衝動に駆られ、何かを残したい気持ちは一切なかった。これまで節制して儉約してきたが、その習慣を捨て去ることを決めた。」これについて反省した五月一〇日の日記で、徐は自問自答した。「それを進歩したと言えるか。それは、左傾的、な形で表した、右傾的、な感情に違いない。」⁽⁴⁹⁾つまり「退路を断つ蛮勇」である前者によつて後者の「絶望感」を表出させたということである。

では、その四年後の五二年において、戦死への不安を遠退かせたものは、何であったか。客観的にみて、朝鮮における戦局の安定は、戦死への恐怖感を大きく和らげる理由の一つであった。戦争初期に米軍機の空爆で断たれていた補給の問題も大きく改善された。五二年一月一日、徐は「朝鮮では昼間も自動車も走らせることができるようになった」との記事を読んだ。三月一六日、朝鮮前線から一時帰国した者から聞いた話によれば、志願軍の将兵は国内の解放軍の中級将校に供給される水準以上の良質な食事をとっており、「三食は米、小麦粉のご飯で、肉もふんだんに食べられる。不足しているのは野菜くらい。したがってみんな血色がよく太っていて、虎みたいな壮健さである。」またこの時期に問題とされた米軍による生物兵器の使用についても、「みんな予防接種を受けており、それほど恐れていない。前線に行けば行くほど軽く、むしろ鴨緑江のこちら側においては衝撃が大きいようにみえる」と語られた。そもそも戦争自体がまもなく終結するであろうことが観測され、四月一三日に朝鮮に行く友人との情報交換のなかでも、このことは話題に上っていた。⁽⁵⁰⁾

とは言え、赴く先は死と隣り合わせにある前線であったことには変わりない。朝鮮戦場に一日も早く行きたい理

由について徐自身が四点を挙げています。そのうち最初の二点の理由、すなわち兵隊と苦楽をともにしてみずからの精神を陶冶することと、創作意欲を高めることは、四年前もあつてしかるべきものであつたが、内戦当時は不安に打ち勝つほどのものにはならなかつた。第三に挙げられた理由は国際主義を理解することであるが、いかにも抽象的なもので、後付的な感が否めない。第四は、すでに朝鮮に従軍していた恋人、申芸ユンに一日も早く会いたい気持ちであつた。⁽⁵¹⁾徐にとつての「国際主義」は熱愛した恋人の存在が朝鮮にあつてはじめて具体的な意味をもつものとなる。

事実、その一年前の五月二七日に帰国志願軍将兵による報告会を聞きに行つた徐が日記において、「それも主に芸の生活条件を想像するために朝鮮の環境を知りたかつたから」⁽⁵²⁾と記したことから、かれの朝鮮に対する関心の所在はうかがわれる。それを、「前夜、アメリカ軍を相手に朝鮮に赴いた夢をみた。もうすぐ芸に再会できるため、とても嬉しかつた」⁽⁵³⁾という三月一三日の日記の記述と併せてみれば、恋人に対するその一日千秋の思いこそが、朝鮮行きに伴う戦死の危険を前にしても一時的に「盲目」とさせ、高揚感すら徐にもたらした大きな理由であつたと言えよう。

戦死への不安は、しばらくの間、主として戦火に晒される恋人の身の上を案じる形で表出された。徐は申芸が所属部隊に従つて朝鮮に派遣されることになつた五月二月頃、それを日記に記した。「芸が、もうすぐ朝鮮に行つて戦争に加わろうとしている。残酷かつ壊滅的な危険を冒そうとしている。彼女は暗くじめじめした洞窟に住み、夜中に奔走し、砲弾とその破片が飛ぶ際に出す空気との摩擦音を聞きながら、血みどろな犠牲者を目の当たりにすることにになる。」そして、その「彼女が亡くなることを想像することもたまにはあつた。」しかし日記において、この状況設定に対して設問も解答も行わないまま、直後に、「負傷」した場合の状況設定に跳躍した。「私の脳裏にこ

のような設問があらわれたことがある。かりに彼女は一本の足または一本の腕を失ったら、私はまだ彼女を愛することができるか。かりに彼女の怪我が醜いほど重大で、たとえば片目が潰れたり、唇が裂けたりしたら、私はまだ彼女を愛することができるであろうか」とみずから問題を提起しながら、肯定的な回答を続けた。⁽⁵⁴⁾

恋人の戦死に関する明示的な記述は、設問も回答もないまま、その一回のみであった。徐は死別を暗示する状況すら可能な限り意識上に浮上させないよう努めた。それは、朝鮮に赴く学友の蘭占奎が、出発前に語った「縁起でもない言葉」が夫人の心に暗い影を与えたことを、徐が否定的な態度を示したことからも、うかがわれる。徐によれば、蘭は餃子を食べる際、「これは研究所で食べる最後の餃子かもしれない」と語ったり、物品の処理についても「もし私が死んだら、これをこのように……」と語ったりしていたため、留守を預かる夫人はそれを思い出すたびに、不安で堪らなかつた。それとは異なり、出征を控えた申「芸はこうした訣別するような言葉を忌避し、自分も彼女宛の手紙には意識的にそれを避けている。私は、最後」という言葉を、多くの場合、省略して使わない。芸はある来信において「生離死別」という熟語を「生離活別」に書き替えた。これも同じ気持ちからとつた行動であつた。」徐はそれを「迷信」とせず、「民族の伝統的なスタイル」をもつ気持ちの表れと表現した。⁽⁵⁵⁾

徐は申芸と相互の間で「戦死」の言葉を忌避したのみならず、第三者から聞かされることも極度に嫌つた。五年一月二三日に、帰国中の第一九兵団の購買担当者に由来した伝聞、すなわち「朝鮮では非常に環境が厳しく、人の死は日常茶飯事で、しかも前線か後方かを問わずだ」という話を間接的に聞いたとき、事の真偽を確かめるよりも「トーンに悲哀感が強すぎる」ことを理由に「この購買担当者は悪いやつだろう」と結論付けた。⁽⁵⁶⁾

しかし「戦死」は徐の心中に顧みられなかつたわけではなく、意識上に可能な限り浮上させないように抑圧されたに過ぎなかつた。意識下に抑えるにはそれを意識しなければ出来ないことを考えれば、論理的に矛盾するが、そ

の矛盾こそが徐の葛藤の強度をもっとも正確に表現している。前述したように、五〇年一月五日の日記において、徐が「落ち着きのなさ」の類例を記憶の中から探すべく遡及したのは「二、三年前」と記されたが、この搜索範囲の上限の選定も、端的にそれを現している。つまり徐は一旦、二年六ヶ月前の四八年五月頃の落胆ぶりを思い出しながら、それが含まれないようにその一步手前で時間を区切ったのであろう。少なくとも五〇年深秋の時点では、朝鮮戦争に対する徐の抱いた感情が五二年のそれとは正反対であったことは間違いない。その暗澹たる気持ちを醸し出した心象風景はどのようなものであったのか。それまで徐が経験してきた戦争の実態について、次節で考察する。

2、戦争の惨状

五〇年深秋以前、徐の体験した戦争の惨状は、物的破壊と人的死傷という二つの側面に分けられる。徐の戦争体験がかれの戦争と平和に対する観方に影響を与えたことは、国共内戦時の事例からも、うかがわれる。四七年六月に華北聯合大学で国共内戦の将来に関する予測が行われたが、徐は武力による徹底的対決よりも調停や妥協による解決方法を唱えた。三日夜、徐は文学部の数人の学友と内戦の終結について議論があり、徐は「①蒋介石を徹底的に倒すことが難しいであろうこと、②和平交渉で国共双方が大きく譲歩し、または第三者の加わった調停により和平を実現する可能性が高いこと」を明確に表明した。第三者とは、むろん米ソのいずれかのことであろう。この②の観方について、学友の徐孔からの反対に遭った。五日にも学友の間で時事論戦が一日中、行われた。徐光耀はもう一人の学友と組んで、内戦の行方をテーマとして他の組の学友と大論戦を繰り広げた。かれの予想に反して、ま

もなく「自分らは少数意見となり、絶対多数を向こうに回した。」しかし、かれは「自説を正論だと信じて強く主張した。」日記に具体的な論戦内容に関する記述は見当たらないが、「もしかしたら相手を傷付けたかもしれない」と反省した⁽⁵⁷⁾ことから、相手をかなり激しく論駁したようである。

徐の論点を支えたもつとも大きなもの、言い換えれば、少年兵出身の徐と学校生活しか知らない多数の学友とを分かつ決定的な要因は、第一線における戦争体験の有無にあった。それは、徐自身が後に記したように、ある「報告会」で聞かされた戦場逸話の受け止め方からも、うかがわれる。一〇月二日に、徐は山東省の戦闘に関する報告会を聞いた。冒頭に解放軍の軍紀の正しさに関するエピソードがあり、それによれば、「行軍を続けた多くの兵隊は空腹の限界に達したが、その時、一籠の棗を見つけた。内心の強い葛藤を経ながらも、ついに誰もそれに手を出さなかった。その後、次から次へと別の部隊がそこを通ったが、その一籠の棗は元のまま変らなかつた。その一番上に最初から三つの傷んだ棗があつたが、全部隊が通つた後も、その三つの傷んだ棗は一番上にある元の状態で置かれたままであつた。」それを聞いた会場からは賛嘆の声があがつたが、徐はそのお話に「誇張した部分は避けられず、前線に行ったことのない者、従軍経験のない者があるいはそれを信じるかもしれないが、自分は少し割引して聞いた⁽⁵⁸⁾」と記した。

現にわずか二週間前の九月中旬、国民党軍に追われていた徐の所属部隊は、その逸話と異なる行動をとっていた。雨のなかを行軍して徐の出身地付近の村で休憩したが、村民がみな退避したため誰もいなかった。「止むを得ず適宜に民居に入り、洗濯したり毛布を乾かしたり、穀粉を搜して炊事をした。……この一帯の村々は悉く酷い目に遭つた。みんな手当たり次第物色し、見つけたものを食べた。民家の損失が極めて大きく、それを見た自分は言いよらない辛い思いをした⁽⁵⁹⁾」ここで徐は、文学部の学友と時事論戦した当時のことを思い出し、次のように結論付

けた。

「みんな蒋介石を徹底的に消滅すべしと主張し、主張なり観方なりそれ自体が正しいとは言え、若者の情熱だけで適当に言っていたに過ぎない。かれらは物事を総合的に捉えず、新聞に報道されている戦勝のニュースのみを見ていた。戦争のもたらず艱難と巨大な損失を経験したことがなかったからである。」

同時に徐光耀は、その夏秋にみずからと行動をともししてきた徐孔の場合、以前に聞いた報告会と比べ、「今回はそれを信じる度合が異なるのではないか」と日記に書いた⁽⁶⁰⁾。それも四ヶ月前の自説に徐孔が反対していたことが、思い出されたからであつたらう。四ヶ月前の論争の際、徐孔を含む学友の多くは実戦経験がなく、破壊や死傷等、戦争によって引起される悲惨な状況を想像する力が乏しかった。かれらと異なり、盧溝橋事変の翌年に八路軍に加わった徐光耀は、すでに一〇年近い軍歴をもつ「老兵」であり、戦の「大義名分」にかかわらず市民が受ける甚大な被害を含む戦場の実情を熟知していたのである。

市民の戦争被害について、徐は四九年四月の太原攻略戦においても見聞した。戦闘終結後の二八日に徐は南門から入城し、閻錫山の住所であつた省政府を訪ねた。省政府から南方方向に遠く離れていないところに、巨大な鼓楼があり、「北京のそれよりも高く、門洞の階を入れれば五階もあつた。歴史が古く雄壮な偉容をみせていたが、砲撃中に多く被弾したため、門洞の一部は大きく崩れ、上層部にあつた扉や窓が零落して無残な姿と化した。」その後、一行は市内もつとも賑やかな繁華街の一つと言われた橋頭街に向つた。「町にあまりにも多くの砲弾が打ち込まれ、建物にはほとんど例外なく被弾した跡が残っており、壁が崩れた家も少なくなかつた。目に入ってきたのは、実に

荒れ果てた惨状ばかりであった。」徐は「わが軍の砲兵の威力はこれほど強力かつ猛烈で、どんな施設もそれには堪えられなかった」と感慨し、同時に、無血開城した北京のことを思い出しながら、太原市で無意味な抵抗をした閻の部隊を非難した。⁽⁶¹⁾

徐は太原市民の受けた戦争被害を目の当たりにして強い衝撃を受けた。徐の日記によれば、太原は人口も工場も多く繁盛していたが、「残念ながら近来、市民の生活があまりにも苦しく、道を行く人々は例外なく、骨と皮ばかりに痩せこけて顔色が悪い。」被害はさらに市民の精神世界に及び、日常の挨拶文化まで一変させたと、観察された。「戦争は太原市民に恐ろしい恐怖感を与えたようである。知人間の挨拶には、まずこちらから、さぞ怖かったですか?」と聞き、相手は早速「お蔭さまで。そちらもお元氣なようで」と返し、あるいは、「いや、元氣、元氣。みんな元氣」と応じる。あたかもお正月を迎えた田舎の年賀挨拶のようで、または、別の世界からこの世界にやって来たような光景、もしくは一度、死んだ者が生き返ってきたような気分であった。⁽⁶²⁾

この一般市民に関する活写は、徐がかつて兵隊の間でみた光景の再現でもあった。前年の七月に華北野戦軍第二兵团が河北省定興県を奪取する戦闘において夥しい死傷者を出したが、徐は兵团政治部宣伝部から記者として取材し、戦闘終結後の二〇日の日記には、定興城に攻め入り「犠牲が異常に大きかった」と記した。犠牲という抽象的な言葉に血を通わせるかのように、さらに二二日の日記に感想を記した。「長年ご無沙汰していた古い戦友と思いがけずに再会した時、その気持ちには普通ではない一面がある。驚いたという意外感のうち、悲しみも喜びも含まれる。何故なら、これほどの年月を経て、よく生きていたのだとの思いから、この再会は実に貴重なものと考えられたからである。定興城のなかで狗子君に会った時、非常な喜びを感じたのもそのためであった。」狗子は徐の日中戦争中の戦友であった。

徐が張り付き、攻城を担当した第三中隊だけの死傷状況をみても、「中隊長が、城壁上で爆弾で足一本が吹き飛ばされ、薛副政治指導員が戦死し、中隊の半分は死傷した」と戦闘開始初日の一七日の日記にある。同中隊の九分隊（班）に至っては、兵隊の死傷率が七割以上に達した。この惨状に、生き残った同分隊の長が嘆きを漏らした。「この一〇人ほどの兵士を育てるのは簡単なことではなかった。畑いじりと同じで、来る日も来る日も、あれやこれやでそれにかかりつきり、やっと大きくなったかと思いきや、急に雹に降られて、一、二人しか残っていない。悲しいよ。」この第三中隊の将校に思わず泣いた人も多くいたと、徐は日記に記した⁽⁶³⁾。なお、華北地域の雹災被害について、定興県に限って調べると、二〇代の兵士にとって物心がついた頃から四八年に至るまでの期間に発生し、かつ同県地方志に記録されるほど大規模なものだけで、三八年に「雹による災害、固城一帶の綿花が不作し、甚だしいところでは、作物は完全に潰された」と、四六年の「春には深刻な干ばつに加えて雹害に遭い、小麦は大きな被害を受けた」という記述がみられ、この攻略戦の戦死者には皇城の西南方向にある東冊上村出身の耿文榮が含まれる⁽⁶⁴⁾。

3、トラウマ

以上のような戦中体験は、朝鮮戦争に対する後方支援への応募を決める五〇年秋冬の時点に、徐のなかで蘇えたのであろうか。これに関する直接的な記述は、同時期の徐の日記には見当らない。しかし日中戦争時の経験が終戦後もなお悪夢の中に出たことは確認される。つまり、徐は四六年四月七日の夜から八日の未明にかけて、四年前の四二年五月一日から始まった日本軍による大掃蕩作戦当時の悪夢に魘された。数百人の日本軍に包囲されるなか、

徐は部隊の魏沢南政治委員を援護しながら包圍網の突破を四、五回ほど試みた。「そのなかで抜群の勇敢と果断を見せたが、突然夢から醒めた。体中に汗を掻いていて、喘ぎながら、激しい動悸に襲われた。」これについて徐自身は、「日本軍が自分にどれほど深い印象を残してくれたかは、このことから分かる。ちょうど『導報』紙上において某著者が書いたとおり、日本軍が、あまりにも私の心を傷つけた、ということである」と日記に記した。⁽⁶⁵⁾

五〇年秋冬から一年あまり経過した五二年二月頃の出来事からも、徐の戦中体験がトラウマとなつて折に触れてフラッシュバックしたことが、うかがわれる。二六日に徐は中央文学研究所長の丁玲と雑談した。丁は、「ご両親は健在か。北京にご家族がいるか。継母に對しお母さんと口に出して呼べるか」と質問した。その後、「人を殺したことがあるか。それに大きく悩まされたことがあるか。あるいは小さな悩みなのか」と尋ねた。徐は日記において、「この大きく、大きく悩まされたことがあるかという質問に、どのように答えたらいいいのか、実に迷つた。それを考えてみたが、答えようがなかった。彼女も深追いせず、止した。それにしても、これについて聞いてきた彼女の狙いは、どこにあったのか」と記した。⁽⁶⁶⁾

丁は徐の創作した小説『平原烈火』について、当時半ば神聖化されていたソ連の作家の一人、コンスタンチン・シーモノフ (Константин Михайлович Симонов) 著の小説『昼となく夜となく』と比較し、主人公の周鉄漢にやや型にはまった嫌いがあるのを除けば、後者に比肩しうると高く評価した先輩作家であつた。⁽⁶⁷⁾ その作品評の当否は別として、丁が『平原烈火』を読んだとみて間違いないであろう。丁の発した徐の「継母への呼称」に関する質問は、作中の設定、すなわち八路军軍の中隊長を務めた周鉄漢が、日本軍に協力した地主階級の「養父」に對してもつ感情設定と、作者の実生活のなかの感情との間に、何らかの関係がないかという問題関心から発せられたように思われる。⁽⁶⁸⁾ また同作中に、掃蕩作戦を展開した日本軍と対日協力軍によつて包圍されるなか変節を試みようとした八

路軍のある隊員が周の手によって処刑された際にみせた歪んだ表情などについての克明な描写⁽⁶⁹⁾に、非常な衝撃力をもつて読者の心を揺さぶるリアリティがあり、それを可能にしたのは類似した実際の現場に立ち会った作者の体験からか、それとも逞しい想像力のみで書けたのかという丁の問題関心も、うかがわれる。

徐が返答に窮したのは、丁の質問にある「殺人の有無」に関する前半部分に対してではなく、むしろそれを前提として聞かれた「悩みの有無や大小」という後半部分にあった。少年時代から徐は六年間あまり八路军のなかの「除奸部門」に所属していたが、⁽⁷⁰⁾「奸」とは味方のはずのものが「変節」して日本軍の協力者となった人々を指し、それを「除去」することが仕事内容であった。

ここで注目されるべきは、丁が質問において殺害対象を「敵」ではなく「人」と尋ねたことである。戦時において「敵」や「裏切り者」等に対して制裁が実行されたが、時間が推移するにつれ、とりわけ平和回復後においては、かつてそれを可能にした大義等、正当化する理由は薄れていく。やがて対象者の、同じ生命をもつ一人人としての側面が、生き残った他方の当事者のなかで大きく浮上する。折に触れてフラッシュバックするのは、相手の最期に見せたその目つきを含む表情、発した声、匂い等である。敵に限らず戦友について、九一歳の考古学者の大塚初重が一八歳当時の体験を回想した際に言及した「触感」も、その一つに数えられる。四五年四月、上海第二気象隊勤務の命令を受けて佐世保から乗り込んだ海軍徴用の輸送船が、航行途中の一四日に米潜水艦の攻撃を受けた。積載していた航空魚雷が誘爆された船倉から甲板にあがる階段が吹き飛ばされ、ちぎれたクレインのワイヤロープが目に入った。それに飛びついて必死で登ろうとしたが、「自分の腰や足に何人もの人がしがみついていた。ずるずると落ちていく。このままでは死んでしまう。そう思った時、手を足で蹴りはらっていました。あの足の感覚は今も忘れません。」⁽⁷¹⁾

徐の足部にも、重傷を負った味方の兵隊の「触感」が残っていたと思われる。四九年六月七日、山西省大同市に駐屯していた徐は、兵団病院で足にあった魚の目の切除手術を受けた後、「その足を見ながら思い耽った。ふと定興県城を攻略した際、南城門付近で見かけたある負傷兵のことが思い出された。」その兵隊は包帯救急所に背負われてきて、門外にある盛土のあたりに置かれた。最初はまだ何回かうめき声を弱弱しく出していたが、救急所のないいた数多の負傷者に医療関係者が専念していたため、誰からも気づかれなかった。長い時間が経過し、盛土の上で横になって一声も出さなかった。「もう駄目か」と思つて徐が兵隊に近づいたところ、かれは人の気配に気づいたよう一回、唸つた。「驚いた私は、かれに、君（トツツ）（同志）、君（トツツ）と声をかけた。彼は一声応じてくれてから、水が飲みたいと言つた。負傷したときは水を飲んではいけないと私が言つたら、かれは何も言わなかった。顔もあげずに盛土に頭を垂らしたまま、死んだように動かなかった。私は玉子を見つけてあげようかとも思つたが、どこかに玉子があるような環境ではなかった。さらに長い、長い時間が経過してはじめて医者はあらわれ、かれを門のなかに担ぎ込んだ。⁽⁷²⁾

足部の魚の目の手術を受けた徐は、自分を励ますべく、約一年前に目撃したその負傷兵のことを思い出し、その光景を実に詳細に日記に記した。しかし、その攻略戦があつた四八年七月一六、一七日の日記にあたりつてみると、その事実は記されていない。むしろ南城門で経験した「足の感触」関連の別の記述が注目される。つまり、一六日の夕暮れ、徐は打通された城の南門通路を潜ろうとした。ちょうどその時、大人数の隊列が通ろうとしたため、脇に身を避けながら進もうとしたら、予想外のことに穴に落ちた。「足元に柔らかく感じた途端に、アイア、アイアの呻き声が聞こえてきた。急いで足を抜いてその場を離れた。」後に、その位置等から、「負傷して動けず、独りで穴の中で声も出さずに何時間もそのまま横たわっていた」者は味方の兵隊であつたと判断された。⁽⁷³⁾ 魚の目の手術当

日に日記にこれを記さなかったのは、思い出せなかったためというより、思い出されたにも拘わらず、紙幅の制約のため、重複記述を避けて攻略戦当時に記録できなかった出来事の補遺に割いた方がよいと判断されたためであろう。その意味において、穴の中の傷兵のことは、少なくとも一度は鮮明に脳裡に浮んだとも読み取れる。

ともあれ、「殺人」に付随した悩みの有無とその程度に関する丁の質問は、質問者の意図にかかわらず、小説創作論から離れて、ヒューマニティ一般に広がる性質をもつ問いにもなるが、まだ若かった徐は、その真意を図りかねたことから、その時点では必ずしも深く理解しなかったようである。しかし、ヒロイズム全盛のその時代を生きた徐ですら、当時の徐の日記を見る限り、「悩まされなかった」と即答できなかったことも、また事実である。

徐の「悩み」の一端は七九年春に、そこから遡って四〇年前に起きた事件のフラッシュバックがあったことから、うかがわれる。徐の回想によれば、三九年冬、徐は防諜に限らず脱走等軍法違反の案件まで扱う除奸課で記録係を務め、送致されてきた関係者の登録を担当した。日本軍の掃蕩作戦に対処するために展開されるゲリラ戦のなかで、案件の処理は「簡略・速決」を原則とされ、分散潜行して安定した収監施設も作れなかったことから、数日間の拘留のうえ釈放するか、処刑するかという二つの選択肢しかなかった。ある夜、強行軍する特務中隊の列には、重罪とされた劉某を含む一〇数名の関係者が拘束されたまま加わっていた。そのうちの一名は急病にかかって出発時から隊列に付いて行けず、馬に乗せられて移動した。途中で落馬し、名前を聞かれても口が利けないほど重篤な状態にあった。包囲網から抜け出すには「数百名の日本軍」が駐屯した武強県城の外側を掠るように通らなければならず、県城に接近しつつあるなか、部隊の緊張感が一気に高まった。徐は急遽、同人の身元確認に課長に呼ばれた。城内の敵兵に気づかれないように背を城に向けた係員が、銃を包むための緑色の人絹の切れでヘッドを覆わせた懐中電灯を短く光らせた。真つ暗闇のなかで瞬間に点滅した光で徐が目にしたのは、「緑色の、歪んだ顔」であった。

劉某と一回しか会っていないため、本人かと課長に問われ、ついに「少し似ているような……」と答えた。その一言で同人は運命が決まり、即時に処刑された。しかし翌朝、人違いと判明した。⁽⁷⁴⁾ なお三九年冬の河北省は、多田駿陸軍中将の指揮する「北支那方面軍」によって進められた「治安肅正」作戦の最中にあり、武強県城内に配置された日本軍は、第一一〇師団・歩兵第一六三連隊（松江）の吉澤正太郎大隊長率いる第一大隊に所属する第三中隊（長・桑谷恒夫中尉）の部隊であった。⁽⁷⁵⁾

このような事件は、丁玲の質問に困惑した徐のなかで蘇えったであろう。少なくともそれから四半世紀以上経た七九年にそれが思い出され、また、さらに二〇年後にその事件が回想されたことは、徐の書いた随筆で確認できる。「その緑色の顔の方の場合は、もし黄泉の国で意識があつて、しかも斬られるに及ばない罪であつたならば、これからも必ず私に対して何かを求めてくるであろう……」⁽⁷⁶⁾ この引用文にある省略号は、徐の原文にある。同文において徐は、翌日に別人と分かつた後、処刑の場合は罪状を布告しなければならない規則があり、秘密処刑は「仁義の師」としての八路军の趣旨に背くということから困り果てていた一同を見て「ますます自分の罪深さを感じたと覚えている」と回想している。にもかかわらず、その文末には「斬られるに及ばない罪であつたならば」と書いた。⁽⁷⁷⁾ 罪悪感に苛まれる強度がうかがわれる。日中戦争という苛酷な環境下に起きた事件とはいえ、古稀を過ぎたこの時点においても、徐の内面にある道徳の力が弱まることはなかつたようである。いずれにしても、そうした言語化できない悩みや悲惨な戦場体験は、五〇年秋冬に朝鮮戦争によってみずからの入所の宿願が無に帰されようとした事態とともに、徐をして、「中華民族の災難は実に重いのだ！」⁽⁷⁸⁾と嘆息させたと言えよう。

終りに

戦争と文芸は本来、相容れない性質をもつものである。両者の不調和は徐にとつて、人生の中断の危機、または文学者になるための平和な環境が戦争によって破壊される危機としてあらわれた。国共内戦が激化した四八年五月、華北聯合大学に残留することを望んだ徐は、希望が叶わず、従軍記者になる命令に従い、戦死を覚悟したと同時に、自らの文学への夢も潰えたのではないかと意識せざるを得なかった。遠くまで見送ってくれた大学の友人らと別れた後、悲しさと深い孤独感に襲われた。九日に河北省正定県の彫橋という村を通った後、「インク瓶を道端の木のグアイジャ上にかけて。これを非常に特別な行動として位置つけた。」⁽⁷⁹⁾中国語には戦を止めることを「掛甲」という熟語があることから、それにかけて「掛瓶」^{グアイビン}という行為を作り出し、文学の道に進むことを止めざるを得ない遺憾の念を託したのであろう。

二日後の五月一日の日記に徐は、さらにこの間のことを記した。「大学を去ることになるとの知らせに接して現在に至るまで、不安感と憤懣とも言える気持ちとが相い交じり、心置きわめて不快であった。精神が萎え、食事も歩行も全てにおいて元気がなく、何か刺激になるようなものは欲しかった。しかし何が刺激になるであろうか。手紙を書くにしても無内容であるし、遊ぶにしても行くところがない。」成就しなかった恋の対象のことを「少し考えたが、つまらなく、これも役に立たなかつた。結局、午後において語彙の整理にとりかかつた。写したり、整理したり、ようやく気持が落ち着くようになった。」⁽⁸⁰⁾

約一〇年後に徐は再び書くことによつて救われた。五七年に「反党分子」として批判されて希望を失つた徐は、

そのまま続けば精神錯乱状態に陥りかねず、家族や社会への負担を考えると、それよりも自殺を選んだ方が増してはないかと思ひ詰めた。苦しみから「解脱」する方法を来る日も来る日も考え続けたが、いい案は思ひ浮かばない。「夜、電球の光を見つめながら、自殺しても死ぬだけで、文章を書いて机上に血を吐いても死ぬ」と思ひ、文学創作に専念することに活路を見出そうと決めた。徐は少年時代に見聞したことを題材に選び、印象に残ったことを思い起こしながらメモし、そのうえ主人公をめぐる一つの物語となるように並べ替えて整理した。⁽⁸¹⁾

作業は五七年一月二十九日から始まった。「夜一〇時過ぎに至るまでそれに取っかかり、一五件の材料をメモに書き止めた。突飛で可笑しい逸話が多く、これくらいで、一幕の面白い劇は書けるであろう。」翌一月十八日に、そのメモ帳を読み返しながら、途中からふと思ひがふわりふわりと漂い始め、「物語のなかに飛び入った。感じるどころがあつて、文章の書き出しまたは第一部分とも言える箇所を書けたような気がした。心がいよいよせわしくなるほど、気分が高揚してきた。先のことと思ひを馳せて、また樂觀するようになった。」⁽⁸²⁾「書きながら面白さが昂じて、思わず手は舞い足は踊り、天に昇つたような気分になつて屋内で巡回したこともあり、あつという間に別の意味の「氣違い」になつたような光景であつた。」この作業は、後に中国で知らない者がいないほど有名な映画『小兵張嘎』の原作として結実したが、徐の自殺願望を打ち消すための副産物であり、徐自身も主人公の少年をみずからの「命の恩人」と位置づけたように⁽⁸³⁾、そうした作業のなかで徐は心の平静を取り戻し、生の愉悅感を得た。

しかし「抗米援朝」運動が展開される五〇年秋冬には、文章を書く行為は以上のそれと異なるものを徐にもたらした。徐は中央文学研究所に入学した初日にあたる一月一日午前、「反米援朝の創作運動に関する座談会」に加わり、任務として反米をテーマとする文学作品を、修習生一人当たり少なくとも一編は創作しなければならぬことが求められた。さつそく翌々日に徐は、『カービン銃』と題するその趣旨の短編小説の構想を練つた。完成させ

る自信はあったが、「その作風にしても、形式にしても中国人のものらしくなく、ソ連人のもののような気がする⁽⁸⁴⁾」として違和感を拭えなかった。

七日に、アメリカのことを知るべく一日中新聞を調べたが、「創作のモチベーションを起こすような状態にはつながらず、これまでの構想もさらなる展開がみられず、書く気分になれなかったことに焦燥感を覚えた。」一五日から書き始めたが、座談や学習等によって数度中断せざるを得なかった。難渋の末、ようやく二三日に五〇〇〇字ほどの初稿は出来たが、「かりにこれも創作と言えるなら、実に恥ずかしい限りである。……このような畸形児が生まれた。タイトルこそ立派だが、これで使えるものなら、中国の文芸の惨状が証明されることになる」と意気消沈した。無理して修正を重ねたが、一向に満足するものにはならなかった。この創作において、「何故これ程までに思考回路が塞がったのか。何故これほどまでに実生活の源泉が枯渇したのか。何故これ程までに感情が冷え切ったのか。悪魔に取り憑かれたのか。誰かによって才能が攫われてしまったのか」と徐は自問した。⁽⁸⁵⁾

その答えは、アメリカに関する知識が乏しいことに加え、朝鮮で死闘の対象をかつての抗日戦の盟友の米軍に重ね合わせようとして生まれた振れに求められるであろうが、徐の日記にはそのことが認識されたような字句は見当たらない。一二月一四日、徐は政治学習の一時半を除けば、終日を『カービン銃』の書き直しに費やしたが、段落を分けるための星印を数箇所つけた以外は何ら得るものがなかった。上司の意見を容れて、一旦、修正案を作ってみた。しかし、「どうしても書き直す気にはなれず、どう考えても修正後のものは現在より改善されるどころか、よけい悪くなると思えなかった。」ついに翌日、数箇所の字句修正を行った程度で原稿を提出したが、同日の日記において次のように自戒した。「危険を感じているのは、提出して気が重くなるどころか、一種の安堵感を覚えたことである。これは墮落したことの現れではないか」⁽⁸⁶⁾

- (1) 本誌第五六卷二号、五七卷一号、同二号、五八卷一号に掲載された四編の拙稿のことである。
- (2) 聞章『小兵張嘎之父…徐光耀心靈檔案』（河北大学出版社、二〇一一年）。
- (3) 『徐光耀日記』（以下「徐日記」と略記）第三卷（河北教育出版社、二〇一五年）二九九、三三二、三五七頁。マニアンの朝鮮取材については、李庄「一個中国記者看朝鮮戦争」『社内生活』（人民日報社）二〇〇〇年十一月五日を参照されたい。
- (4) 海光寺会編『支那駐屯歩兵第二聯隊誌』（河原隆雄、非売品、一九七七年）七九頁。「海光寺日本駐屯軍司令部」（口絵写真）清国駐屯軍司令部編『天津市誌』（博文館、一九〇九年）。徐が海光寺兵營に居住していたのは、天津に到着した一九四九年六月二八日から九月五日までの期間である。徐日記 第二卷、四〇五頁、第四卷、五六頁。
- (5) 「臺土成公殉難記念碑（在城南八里台）」（写真 宋蕙璞編『天津誌略』（一九三一年。成文出版社有限公司の一九六九年影印版）一七頁。
- (6) 徐日記、第三卷、三〇八、三三五、三五一、三五六―三五八頁、第四卷、九頁。
- (7) 徐日記、第三卷、二八二―二八三頁。
- (8) 同右、二九五、三〇五、三〇七頁。
- (9) 同右、三〇九、三一八、三一九頁。
- (10) 同右、三二三、三三二頁。
- (11) 同右、三三五、三三七頁。
- (12) 同右、三三七、三四六頁。
- (13) 徐日記、第二卷、三〇四、三二二頁。
- (14) 徐日記、第一卷、三九頁。
- (15) 同右、四一頁。
- (16) 同右、一九―二〇頁。
- (17) 同右、二頁。
- (18) 同右、八二頁。
- (19) 同右、四一、四九、五三、六一―六二頁。

- (20) 同右、一三八―一三九、一四六、二三八―二四四、二五四―二五六頁。
- (21) 徐日記、第二卷、二五五頁。
- (22) 徐日記、第三卷、九〇頁。
- (23) 徐日記、第二卷、三八三、四〇三頁。
- (24) 徐日記、第三卷、一九四―一九五頁。
- (25) 同右、三八五頁。
- (26) 同右。
- (27) 丁玲と胡喬木とは近い関係にあり、また胡は毛沢東の秘書として強い権勢を振るっていた。徐慶全『革命吞噬它的兒女』(香港中文大学出版社、二〇〇八年) 四四―五七頁。
- (28) 徐日記、第四卷、二七、二九頁。
- (29) 同右、三〇頁。
- (30) 同右。
- (31) 同右。
- (32) 同右。ジョジエル・アマードの作品が始めて中国大陸に翻訳出版されたのは、文化工作社刊行の『無辺的土地』(Paris to San Fran、日本語訳名『果てなき大地』)で、呉英による英訳版からの翻訳であり、一九五三年三月であった(滕威『辺境 之南』北京大学出版社、二〇一二年、一五八頁)。また、徐の日記では「阿馬多」と記されているが、一九五〇年代に中国語訳のアマードの作品に多くは「亜馬多」と表記されることから、アマードのそれらとは別の発言を徐が読んでいたと思われるが、出所は確認できない。
- (33) 同右。
- (34) 同右、三二―四〇頁。
- (35) 同右、四二―四九頁。それまで徐が「超自然の存在」に言及したことは極めて稀であり、西北地域への展開のために山西省に待機していた所属兵団が天津駐屯となったとの「大朗報」に接した喜びを表現すべく「阿弥陀仏！」と記した一九四九年六月一六日付の日記(日記第二卷、三九三頁)と、小説『平原烈火』の第一稿をようやく完成した際に安堵した気持ちを表すべく「阿弥陀仏」と記した同年九月一〇日の日記(日記第三卷、五九頁)の計二ヶ所しかなかった。
- (36) 同右、五六頁。
- (37) 同右、五五頁。

- (38) 同右 五六頁。
 (39) 同右。
 (40) 同右 三八頁。
 (41) 同右 五六頁。
 (42) 同右 五六—五七頁。
 (43) 同右 五七頁。
 (44) 同右 六六頁。
 (45) 同右 七〇頁。
 (46) 徐日記、第五卷、一七二—一七三頁。
 (47) 同右 一八六、一九八頁。
 (48) 徐日記、第二卷、七一—七三頁。
 (49) 同右 七四頁。
 (50) 徐日記、第五卷、一〇五、一七四、二〇〇頁。
 (51) 同右 一九八頁。
 (52) 徐日記、第四卷、二二一頁。
 (53) 同右 二二二頁。
 (54) 同右 二〇四頁。
 (55) 同右 四三一頁。
 (56) 徐日記、第五卷、九四頁。
 (57) 徐日記、第一卷、三四〇—三四一頁。
 (58) 同右 三七五—三七六頁。
 (59) 同右 三六二頁。
 (60) 同右 三七六頁。
 (61) 徐日記、第二卷、三三一頁。
 (62) 同右 三二二—三三三頁。
 (63) 同右 一一八、一二二、一二五、一二七頁。

- (64) 河北省定興県地方志編纂委員会編『定興県志』（方志出版社、一九九七年）一二三―二一四、六八九頁。
- (65) 徐日記、第一巻、一四四頁。
- (66) 徐日記、第五巻、一五八頁。
- (67) 徐日記、第四巻、六二頁。丁が徐をシモノフと比較した理由については、丁の著した『西蒙諾夫給我的印象』（張炯主編『丁玲全集』第五巻、河北人民出版社、二〇〇一年、三六二、三六四頁）から、その一端がうかがわれる。
- (68) この地主の養子の設定は、徐日記の記述（第二巻、三七七頁）から推測すれば、徐の継母に対する気持ちよりも、直接的には、伝統劇『斬経堂』をみた後、想起された土地改革のなかであった実話に由来したように思われる。
- (69) 徐光耀『平原烈火』（人民文学出版社、一九五四年）一三一―一四頁。もう一つ迫真の描写は、同小説の二四〇頁にみられる、周の弟が敵を絞殺した場面である。
- (70) 徐日記、第一巻、二四、三九、五〇、八八頁。
- (71) 大塚初重「語る——人生の贈りもの——」『朝日新聞』二〇一八年六月二二日。大塚初重・五木寛之「弱き者の生き方」（毎日新聞社、二〇〇七年）四二―四八頁。戦中、魚雷に命中された船艦から成功に脱出できた者の間で繰り広げられた生存競争の様子については、吉田裕『日本軍兵士』（中公新書、二〇一八年、四六―四七頁）を併せて参照されたい。
- (72) 徐日記、第二巻、三七七頁。
- (73) 同右、一一〇頁。
- (74) 徐光耀『昨夜西風凋碧樹』（北京十月文芸出版社、二〇一六年）四四―五〇頁。
- (75) 防衛庁防衛研究所戦史室『北支の治安戦（へいし）』（朝雲新聞社、一九六八年）一四四、一五二、一八三頁。歩兵第六十三聯隊史編集委員会編『歩兵第六十三聯隊史』（歩兵第六十三聯隊史刊行委員会、一九八六年）一三〇―一三一、一三六―一三七、一五八―一五九頁。なお、日中戦争中、華北地域を含む中国大陸で行われた日本軍の「治安戦」については、笠原十九司『日本軍の治安戦』（岩波書店、二〇一〇年）を参照されたい。
- (76) 『昨夜西風凋碧樹』、前掲、五〇頁。
- (77) 同右、四六頁。
- (78) 徐日記、第四巻、三〇頁。
- (79) 徐日記、第二巻、七三頁。
- (80) 同右、七四頁。
- (81) 『昨夜西風凋碧樹』、前掲、一六二―一六八頁。「反党分子」とされた徐が独りでもがいている一九五七年冬、ノーベル文

学賞がアルベル・カミュに授与された。当時、主人公のムルソーを追い詰めた世の「不条理」を描いた『異邦人』や、希望を失わずに巨岩を山頂に押し上げることを繰り返す『シーシュポスの神話』を読む機会が仮に徐にあつたら、と想像される。

- (82) 徐日記、第八卷、二九七、三〇九頁。
- (83) 『昨夜西風凋碧樹』、前掲、一六六―一六七頁。鉄凝「碧樹蒼生(序)」『小兵張嘎之父…徐光耀心靈档案』、前掲、四頁。
- (84) 徐日記、第四卷、四九―五一頁。
- (85) 同右、五八、七二、七四、七七、八〇―八三頁。
- (86) 同右、一一〇―一一一頁。